

ばんけい

教育ほつとにゆーす
かわら版こ みち
教育の小径No.64
2月号
2014 February

今月のこぼ

三つ子の魂百まで

「三つ子」とは三歳の子どものごとで、転じて幼い子どものごと。幼いときに身についた性格は年をとってからも変わらないということです。幼いころに習い覚えたことはいつまでも忘れないということではありません。



国土館大学教授
北 俊夫先生

「博学連携」は進んでいるか

- 「博学連携」とは、博物館と学校が相互に連携・協力して子どもの教育に当たる取り組みのことです。
- 生涯にわたって学び続ける意欲や態度の基礎を養う観点から、博物館の役割を理解し、効果的に利活用する能力や態度を育てることが求められています。

今月の記念日

天気図記念日(2月16日)

ドイツの気象学者エリヴィン・クニッピングの指導を受けて、日本で初めて7色刷りの天気図が作成されたのが、明治16年(1883年)のこの日です。この年の3月1日から天気図が毎日発行されるようになりました。

「博学連携」とは何か

「博学連携」とは、あまり馴染みがない言葉かもしれませんが。「博」とは博物館のごとであり、「学」とは言うまでもなく学校のごとです。「博学連携」とは、博物館と学校とが望ましいかたちで連携・協力し合いながら、子どもたちの教育を押し進めていこうとする取り組みのごとです。

博物館は、美術館や水族館、植物園や動物園などと同様に、地域にある社会教育施設です。いずれも貴重な教育資源であると言えます。学校とこうした地域の施設とのかかわりは「学社連携」とか「学社融合」などと言われてきました。「博学連携」はその一つのモデルとなる形態です。

これまで、博物館を見学する機会は社会科や総合的な学習の時間、学校行事などでありました。しかしこれまでの施設見学では、ややもすると、博物館側の担当者となかなか打ち合わせをすることなく、見学が学校や教師の都合だけで行われたり、逆に施設の担当者にすべて任せてしまったりすることがありました。いずれにしても、学校と博物館との連携が十分とれないままに行われてきました。そのために、博物館のもつ豊富な情報や教育的な価値が学校の教育活動に十分生

かしきれなかったと言えます。

わが国の博物館の数は数千を数えています。世界でも有数の博物館王国です。博物館と連携をとり、博物館の教育的価値を学校としてどう有効に利活用するかが課題になっています。

なぜ「博学連携」なのか

博物館には学芸員などの専門家がいます。教科書では見られない実物や本物の教材があります。博物館は教室とはまた違った学習の場になります。博物館を「もう一つの学校」としてとらえることによって、子どもたちの学びの場や内容を広げることができます。

このことを踏まえると、学校として博物館を利活用することで得られる効果には、次のようなことがあげられます。

一つは、博物館を利用することによって、教育活動を充実させることができます。教師の話や用意した写真をもとに学ぶことと比べて、実際に実物を見たり専門家からの説明を聞いたりして学ぶ方はるかに高い教育効果を期待することができます。

二つは、現在の学校教育を充実させるだけでなく、博物館を生涯にわたって利活用しようとする意欲や態度、能力の基礎を養うことです。博物館の利活用の仕方を学んだ子どもたちは、将来さまざま

な社会教育施設を利用し、生涯にわたって学習に取り組むことができます。

三つは、学校と地域が一体になって子どもの教育を進めようという機運を醸成することができることです。今、それぞれの施設や機関などの専門性を生かしながら子どもの教育に当たることが求められています。「餅は餅屋」です。

「博学連携」のポイント

最近の博物館では、「見て学ぶ」だけでなく、触って、試して、体で学べるような「参加体験型」「ハンズ・オン型」も工夫されています。それぞれの博物館の特質を生かした利活用が求められます。

一般には、学校から博物館に直接出向くことが多く行われています。これはこれで教育的な利用方法ですが、学校が博物館から離れていたり、時期的に見学することが困難だったりすることがあります。展示物の一部を貸し出したり、学校を巡回しながら展示したりしている博物館もあります。「移動博物館」「出張展示」などと言われています。博物館の学芸員などに「出前授業」を依頼することもできます。

博物館と学校の双方がそれぞれの特質を発揮しながら、連携・協力体制をつくるのが重要なポイントです。

ひと粒300メートル

「ひと粒300メートル」というキャラメルのキャッチコピーをご存じの方も多でしょう。あるとき5年生の子どもたちに「ひと粒300メートル」とはどういう意味かを聞いてみました。

すると、多くの子どもたちから次のような答えが返ってきました。

「ひと粒なめると、300メートルぐらい走れるほどのエネルギーが蓄えられる」「ひと粒で、300メートル歩いていくだけの力が出る、栄養のあるキャラメルだということ」

いずれもエネルギーや力や栄養と結びつけた考えです。順当なところでしょう。ところが、少数意見ですが、次のような考えもありました。

「ひと粒なめて歩き出す（あるいは走り出す）と、300メートルくらい行ったところで、口の中のキャラメルがちょうどなくなる」「ばちんこ（Y字型をした木の枝）で飛ばすと、300メートルぐらい飛ぶのではないか」「キャラメルの紙をはがして、手のひらに乗せ、両手で押さえながら左右に伸ばしていくと、300メートルまで伸びるのではないか」

いずれもその子らしいユニークな意見です。子どもの発想はじつに豊かです。おとなが想像もできないことを考えるものです。子どもが成長するにつれて、豊かな考えが徐々に固定化し、豊かさがなくなっていくのはどうしてでしょうか。子どもへのおとなの接し方に何か問題があるのでしょうか。

一つの正解を求めるのではなく、発想の豊かな自分の考えをしっかりとる子どもを育てたいものです。



北方領土の問題

北方領土とは、北海道の東方沖に位置している択捉島、国後島、色丹島、それに歯舞群島の四島をいいます。

1855年2月7日、わが国はロシアとの間で「日露和親条約」を結びました。そこでは、択捉島とウルップ島の間の国境が確認されていました。ところが、日本がポツダム宣言を受諾したあとの、1945年（昭和20年）8月28日から9月5日までの間に、これらの島々が全てソ連（当時）によって占領されてしまったのです。当時、四つの島には約1万7千人の日本人が住んでいましたが、1949年7月までにほぼ全員が本

国帰還することとなりました。わが国の政府は、北方四島の帰属の問題を解決してロシアとの間で平和条約を締結するという方針のもと、ロシアとの間で北方領土問題の解決のための交渉を粘り強く進めています。

5年の社会科では「わが国の位置と領土」について指導するようになっていきます。社会科の「解説書」には、北方四島はわが国固有の領土であること、それが現在ロシア連邦によって不法に占拠されていること、わが国はその返還を求めていることなどについて指導するよう示されています。各学校での適切な扱いが求められます。

2月7日は「日露和親条約」が結ばれたことにちなんで、「北方領土の日」と定められています。

コラム 北俊夫の「3.11」体験談(4)

ロビーで見たもの

羽田空港のロビーで立ちすくんでいると、そのうち帰宅する際に乗る東京モノレールが終日運休することを知らされました。ほかのルートで自宅に帰ることはできないのかと周りに目をやると、空港から出発する交通機関の運休情報が掲示板などによって次々と伝わってきました。羽田空港の駅から京急蒲田駅を経由する京浜急行線も、各地域に向かっている空港リムジンバスも、そしてJRや地下鉄の各路線でも全ダイヤで運休していることがわかってきました。

羽田空港が周囲から孤立していることを感じ取ったのはこの時でした。自分でも、徐々に不安感と孤立感が増幅していくのがわかりました。

ロビーに改めて目をやると、大勢の人が荷物をもって椅子に座り込んでいまし

た。フロアに新聞紙などを敷いて座り込んでいる人もいました。意外にも落ちついている様子でした。動くことを諦めているようにすら見えました。

羽田空港では、これまで手荷物を検査した後に、待合室でテレビを視聴することはありましたが、ロビーでテレビを視聴した経験はありませんでした。そのため私には、どこに行けばテレビで状況を確かめられるのかわかりませんでした。

午後8時頃、空港職員にテレビの置かれている場所を聞きましました。フロアにビニールを敷いて座り込み、テレビの画面を食い入るように見ました。そして、この時、東北地方の太平洋岸で巨大地震が発生し、津波の被害を受けていることをはじめて知りました。事の真実を知ったのは、地震が発生してから5時間ほどが経過してからでした。

INFORMATION

いま話題の **情報モラル教材**

情報活用トレーニングノート

体験できます。くわしくはWebで。

検索ワードは

ぶんけい情トレ

検索

<http://www.bunkei.co.jp/bunkei-app/news01/>

各種テレビ・新聞で
取り上げられました!

体験型
教材



編集後記

西に見える白い伊吹山が寒そうです。冷えた外気で300m走ることも辛いくらいですが、私自身、この山を見ながら地道に走っています。「何も咲かない寒い日は、下へ下へと寒をのばせ。やがて大きな花が咲く。」高橋尚子が恩師から贈られた言葉です。暖かい時期への備えは今しかできません。(T記)

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2014年2月1日